

総合人文科学研究センター研究部門
「信頼社会」研究

2015 年度シンポジウムの報告

日時：2016 年 2 月 2 日（火）16 時から 19 時
会場：戸山キャンパス 36 号館 382 教室

このたび、藤本一勇先生の企画運営の下、「信頼社会」研究の 2015 年度シンポジウムが、「テロリズムを考えるーデリダ、ドゥルーズ、レヴィナスの哲学からー」というテーマで、参加者約 30 名とともに、三人の提題者を迎えて開催された。提題者は、渡名喜庸哲先生（慶應義塾大学）、鈴木泉先生（東京大学）そして藤本一勇先生（早稲田大学）である。

渡名喜庸哲氏は「テロリズムを考えるーレヴィナスから」という表題の下、レヴィナスにとっての戦争が、垂れ幕としての「公的」秩序を瓦解させ、むき出しの「ある」を露呈させるものであることを指摘し、さらに、レヴィナスの『全体性と無限』から二つの戦争観を取り出して説明した。すなわち、「全体性」としての戦争と「全体性」なき戦争である。渡名喜氏は後者に注目し、それが「顔」を前提したものである点を解明しつつ、そのテロリズムとの連関を主張した。鈴木泉氏は、「テロリズムと戦争機械ー『パリ同時多発テロ』を機会に一」という表題の下、今回の「パリ同時多発テロ」が哲学的に目新しいものを含まず、この類の「戦争」に巻き込まれないことが肝要であると主張した。また、ドゥルーズが「国家装置」と「戦争機械」とを区別し、後者がその純粋形態では国家と無関係であること指摘した上で、今回のテロを分析しつつ、それを取り巻く多様な要因に言及した。藤本一勇氏は「テロリズムを考えるーデリダから」という表題の下、今回のテロに目新しいものがないという論点で鈴木氏に同意した上で、デリダの「自己免疫性」概念を用いて、今回の「戦争」が象徴秩序の組み換えを迫る「象徴闘争」であることを主張した。また、いかなる国家もその創設時を振り返れば、その無根拠性と暴力性が明らかになることを指摘し、近代国家と「イスラム国」が同質的存在であると主張した。さらに、この同質性こそ近代国家が「イスラム国」に有効な対策を打ち出せない理由であると指摘した。

三人の発表の後、休憩を挟んで、提題者相互の質疑、さらには一般参会者を交えての質疑が行なわれた。その際、渡名喜氏が今回の「パリ同時多発テロ」にも目新しい点があることを指摘し、それは他の提題者とも共有された。（報告書とりまとめ：御子柴善之）